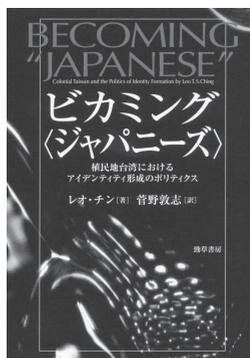


レオ・チン著 菅野敦志訳

# ビカミング〈ジャパニーズ〉

——植民地台湾におけるアイデンティティ形成のポリティクス

勁草書房／2017年8月／296頁／7500円＋税



## 菊池一隆

### まえがき

まず著者レオ・チンの紹介から始めよう。その人生は本書の内容と深くかわるからである。彼は一九六二年に台南で生まれた。父は中国遼寧省出身の外省人、母は台湾の台南出身の本省人で、二つの相反する立場を幼くして直接体験した。「日本鬼子」を非難する外省人の叔父と、日本文化に憧れる母との断層も経験した。その上、当時の台湾は二・二八事件、続く五〇年代「白色テロ」の影響が残り、重苦しい雰囲気にあった。一九七〇年に八歳の時、父の仕事の関係で日本に家族で移った。台湾にとって七〇年代といえば、中華民国の国連脱退、七二年日台断交・中華民国の国際的孤立化、七九年にはアメリカの中華人民共和国承認と苦難の時期が続いた。他方、日本は高度成長下で自由な雰囲気があった。また、日米安保条約に反対する学生運動、労働運動が激しく闘われた時期でもあった。こうして政治面で窒息しそうな台

湾と日本は全く異なった様相を呈していた。レオ・チンは大阪中華学校、次いで神戸の国際学校で学び、一八歳までの計一一年間を日本で多感な青少年時代を過ごした。この間、父の故郷・中国も訪問し、台湾と中国大陸との関係を意識せざるを得なかった。ここで台湾で経験した外省人、本省人の二方向に加えて三、四方向から見る眼を養った。一九九一年には渡米、客観的に物事を見る眼を養い、研究に開眼した。大学院はカルフォルニア大学に進み、博士学位を取得、現在、デューク大学に勤めている（「訳者あとがき」など参照）。このように、著者は日本・台湾・中国の三角関係のなかで生成される「台湾アイデンティティ」をテーマとして社会的視点から研究する最適任者であったといえよう。なお、評者は歴史研究者であり、本書評はその視点からのものである。

## 各章の構成と内容

本書は、二〇〇一年アメリカで出版された（二〇〇六年中国語版、今回、二〇

一七年に日本語版を出版）。「日本語版への序文」などを見ると、その問題意識は一九八〇年代後期以降、九〇年代はアメリカ学界でコロナール、ポストコロナール研究が開始されていたが、英仏など西欧植民地を対象としていた。それに対して著者の場合、日本と台湾植民地主義を研究対象とし、特に植民地下の人々の生活に対する「文化の重要性とその混乱」の解明にあった。

本書全体の構成は以下の通り。

- 序章 かつて「日本人」だった人々
- 第一章 台湾の植民地化——日本による植民地化、脱植民地化、コロナリズム研究の政治学
- 第二章 絡み合った抵抗——関係性、アイデンティティ、植民地下台湾における政治運動
- 第三章 同化と皇民化のあいだ——植民地プロジェクトから帝国臣民へ
- 第四章 反乱者から志願兵へ——霧社事件と原住民をめぐる野蠻と文明の表象

第五章 「濁流の中へ」——『アジアの孤児』にみる三重意識と植民地の歴史学

このように五章構成であるが、全体の結論はない。各章で日本人の研究や台湾の小説を分析、自らの見解を披露、それ自体が結論に相当すると考えてのことだろう。

各章の内容を要約すると以下の通り。

序章では、台湾原住民と台湾人との矛盾は論ぜず、かつての「日本人」と位置づけ、論を組み立てる。まず「魂の帰還」を求める台湾原住民と、それを拒絶する靖国神社の対応を見ながら、植民地時代と戦後における差別・被差別の持続を押さえる。

第一章では、台湾の植民地化問題。西欧帝国主義と異なり、後進資本主義国の日本は台湾、朝鮮という近隣で、人種的近似性、文化的淵源を共有する「親縁性」があった。第二次世界大戦の敗北により日本帝国は一瞬にして消滅した。

その時、日本はアメリカの政策と冷戦によって脱軍事化、経済的奇跡により植民地問題を回避した。とはいえ、日本とその植民主義を特殊化できず、欧米のそれとの同質性があるとしながらも、他方で、同一視ではないとも主張する。日本敗戦後、台湾ではその空白を埋めたのが大陸から来た国民党軍であった。その腐敗に憤りを感じた台湾人は日本の植民地時代を回憶し、それを再編成・再創造した。

第二章では、台湾における一九二〇年代以降の政治運動を台湾意識と中国意識の形成から分析する。こうした自民族中心主義・ナショナリズム（「新民族主義」）の分析には階級闘争を看過できないと強調する。階級利益と植民地的圧迫の間の矛盾を通じて「台湾派」と「祖国派」の概念は対抗形態ではなかった。二〇年代後期に台湾の「新民族主義」運動がリベラル派とマルクス主義に分裂したが、それは「外来」の政治的影響ではなく、植民地経済内の階級利益と日本資本主義の力量の増大、世界恐慌による農民

の困窮などによるものである。より重要なことは「新民族主義」運動に対抗するため、「同化」と「皇民化」が推進され、日本植民主義イデオロギーの構築にあると主張する。

第三章では、同化と皇民化を区別して分析する。皇民化は日本人になるための必要な実践の範囲を示し、同時に同化の内在的矛盾を覆い隠すイデオロギーとして利用された。そして、「日本人として生きる」ことから「日本人として死ぬ」ことに転換させた。他方、同化は、台湾人の政治経済的不平等の下、形式上「日本人」になること、すなわち、日本語を話し、習慣を模倣し、天皇への畏敬の念を示すことが奨励され、皇民化への道筋をつけた。同時に同化は同化させながら差別するという矛盾（同化的差別）が可能となり、かつ加害者側の罪悪感と責任感を一掃する。楊逵「新聞配達人」は「植民地圧制と階級闘争が本質的に同じ」と喝破したとする。

第四章は、「ヒエラルキーの最下層に位置する」台湾原住民に焦点を当て、一

九三〇年「反植民地的武装蜂起」霧社事件後、原住民は天皇への忠誠を表明し、日本の国体に同化される。それに対して全国民衆党の河野密らは、霧社事件を偶発的ではなく、「民族解放」、「労働問題」、及び「植民地の統治全般に関する問題」としてとらえ、日本の公式見解を批判した。太平洋戦争勃発後、「志願兵」となり、「蕃人」から「日本人」へと変容していく。また、有名な『吳鳳伝説』では植民地的慈悲の下で自らの野蛮性に気づく原住民の自責が叙述され、また、『サヨンの鐘』では野蛮人から愛国的臣民への変容を通じて贖罪と献身が脚色された。戦後、原住民志願兵は「日本精神」を持続させたが、「日本人」ではなくなり、日本政府に賠償要求もできなくなった。

第五章で、日本による植民地近代化を台湾、日本、中国の三極から論じる。特に吳濁流の小説『アジアの孤児』（一九五六年）は台湾から日本、中国、そして、再び台湾へと「移動」がある。主人公胡太明は日本植民地台湾で生まれた。日清戦争で切り捨てられた喪失感、孤

独感がある。祖父のいう古典的な中国(明)と日本植民地の観念の間で、胡太明の思考から台湾が抜け落ちる。日本に留学し、台湾の雑踏とは異なり、品が良く、悠久の歴史、親切など、東京、京都の「完璧さ」に圧倒される。とはいえ、日本では台湾人差別があり、「九州出身者」と偽った。上海では尊大な西洋人、小賢しい日本人、西洋かぶれの姑娘などを見た。胡太明は日本側のスパイ容疑で逮捕された後、脱獄して上海で乗船する時、「日本国籍」を利用した。日本植民地化により「汚れ無き」中国人ではなく、日本人でもない「信用ならない人間」になり果てたという。そして、中国、台湾、日本という三重性が調和不能になった胡太明は発狂する。

### 本書の意義と特色

著者の経験、生育した環境から学びとった経験、感覚を基礎として分析し、各種の問題提起をした切れ味のある著作であることは間違いない。

第一に、ヨーロッパ中心的な欧米のこ

ロニアル・ポストコロニアル研究に対して、日本による台湾植民地問題をとりあげ、双方には共通性があるとしながら、主に異質性の分析は説得力がある。その際、アイデンティティの語られ方に着目し、文化面における日本の植民地「遺産」と戦後日本の台湾観を問うという新たな視角と手法は斬新で評価できよう。

第二に、日本では台湾関係研究が漸増している。それは歴史、文学、政治経済、社会、民族学、文化など広範囲にわたる。本書は文化、心性の側面から日本植民地時代と日本敗戦による脱植民地・国民党政権時代との断絶、持続を論じた精神変遷史の色彩が強く、そこにオリジナリティーがある。

第三に、日本植民地下、次いで戦後の本省人、台湾原住民の双方に目配りをし、それぞれ日本、日本人との関係を論じている。従来、本省人は本省人だけ、台湾原住民は原住民だけに焦点を当て、傾向が強いものに対して、双方の「心性」を論じることは貴重であろう。ただし、後述するが、本省人と原住民の関係を論

及していないことは、遺憾である。

第四に、本書の特色として従来の研究に対して引用、同意、反駁を繰り返しながら自らの見解を明らかにしていく。例えば、尾崎秀樹、矢内原忠雄、若林正文、駒込武、小熊英二、陳映真らの言説、あるいは幾つかの小説を叩き台にして分析、考察を加え、自らの意見を構築する。この結果、論旨が明確であり、何が問題かを鮮明にしている。

第五に、国民精神総動員により全面的な全日本化を推し進められ、「多重性」は否定され、祖先信仰が神道、中国名が日本名、台湾服が日本服、家屋も日本式に代わった。日本人と台湾人との矛盾は「皇民」というアイデンティティによってうち消された。要するに日本植民地主義と植民地近代性の抑圧性はアンビヴァレンス(両義性)一掃の中から生まれた。また、「日本人として生きることから……死ぬる帝国臣民になることへの転換が、皇民化の根源的な矛盾」(一一一頁)と指摘するが、これは鋭く本質を突いているといえよう。

第六に、皇民化と同化の関係に関しては興味深く読ませていただいた。なぜなら評者は皇民化達成の手段が同化との認識を単純に持っていたからである。同化の具体的な方策、実態、影響は植民地統治解明の人権無視、社会問題として歴史学的にも考察を加えるべきと考えていた。あくまでも同化とは皇民化に包括され、その付随的なものとしてである。だが、本書を読んで皇民化と一応切り離して考察する必要性を感じた。「同化的差別」、「差別的平等」であり、「加害者側の罪悪感と責任感も一掃する」との指摘は重要だろう。

その他、著者が、楊逵「新聞配達人」の「植民地圧制と階級闘争が本質的に同じ」との指摘に同意し、台湾植民地問題に階級闘争を持ち出すことへの若干の違和感を感じた。よくよく考えてみると、階級闘争的分析が全面否定されているという現状の中で、一定程度再考察、再評価も可能かもしれないと考え直した。

## 感想と疑問

第一に、日本における大陸文学研究の低迷から台湾文学の発見（山田敬三）という言説に、著者は反発し、中国文学、日本文学に対する台湾文学の独自性を強調している。もちろん私見によれば、私も台湾文学はたんなる中国地方文学ではなく、明清時代、日本植民地時代、蒋介石・国民党政権時代の二・二八事件、白色テロに翻弄された独自の歴史、苦悩、台湾の美しい風土・人情から生み出された独特の豊かな台湾文学を生み出したと思う。では、著者は台湾文学を中国文学、日本文学との間の相互の影響、共通性、独自性を具体的にどのように考えるのか。緻密な分析と考証が必要だろう。

第二に、本省人（台湾の漢民族）と一括りにするが、圧倒的多数の閩南人と相對的に少数の客家に大きく分かれる。評者の経験から言えば、両者の思考形態、行動形態はかなり異なる。本書では、閩南人に焦点を当て分析したものと見なせるが、植民地、特に戦後を考察する際、

双方に目配りしなければ、実態が見えてこないのではないか。また、日本人と台湾人、もしくは日本人と原住民の関係のみ立論される。本書では、「台湾人と原住民間の関係・矛盾に踏み込まない」と断り書きがあるので致し方ないが、日本人、台湾人、原住民の三者間ではいかなる構図が描かれるのか。やはり気になるところであろう。

第三に、原住民に関しては、「高砂志願兵」に触れ、また小説を出しているが、分析が十分とは言えない。例えば、原住民を一元的に論じているが、実は南洋戦場に行った高砂義勇隊員の心情も多種多様であり、戦後の原住民の精神状態も単純に割り切れず、種族によって靖国神社に対する姿勢、および日本政府に対する賠償金請求も一様ではない。

第四に、日本植民地下で全体として多くのものが「日本化」されたという。この点に関しては異論はない。では、そうした中で、例えば道教、関帝廟、風習等々の中国伝統がどのように生き残ったか、変化したのか。「日本化」されな

かったものは何かを知りたい。

第五に、歴史研究者としての評者が気にかかることは、本書が歴史を極めて重視する姿勢を一貫して示しているが、実際は時代の背景や歴史的趨勢などを客観化するための史料をほとんど用いていない点である。著者自身の経験や伝聞に依拠して当時の状況、歴史的流れを記述していることから、歴史を正確に押さえているとは言い難く、惜しまれる。重要な歴史的事象に関しては、やはり一定の史料の使用は不可欠であったのではないか。

第六に、本書構成上の問題であるが、本文自体に結論が内包し、そこから読みとることを求めていると考えられる。だが、各章毎の小結がなく、かつ前述の如く全体から導き出した最終結論もない。これらは読者に対して親切とはいえない。また、本文中、難解な言い回しが少なくなく、何度も読み返さざるを得なかった。本文の問題なのか、訳語の問題なのか、あるいは社会的な手法・語句の使用法の問題なのか。例えば、「歴史

に決定づけられた行程の空間化」(二三四頁)等々、繰り返し読んで大体理解できる。同じことを別な言葉で表すことが可能なのではないか。

以上、種々書いてきたが、日本植民地時代に「日本化」を進める原理と影響、また『アジアの孤児』の紹介と分析など学ぶ点が多々あり、触発された。一読の価値があることはいうまでもない。

〔付記〕本書評を執筆しながら、一九七〇年代に評者が大学院生だった頃のことを繰り返し思いだした。当時、東洋史ゼミには十人前後の台湾留學生がおり、その時、閩南人、客家、そして外省人それぞれの考え方の大きな違い、断絶を初めて知った。その中の一人の院生とよく台湾、日本のことを議論した。彼は日本人の後輩院生と結婚し、評者は台中での結婚式にも参列した。本当に残念なことに彼女は日台の異なる価値観と結婚生活の中で疲れ、自殺した。この時のことを思い出すと、今でも胸が痛くなる。この書評を心を込めて彼女の霊に捧げたい。